

報告

大学生と大学教職員が考える「よいノート」の要件

——「甲子園大学ノート大賞」でのコメントを基に——

増田将伸・西川真理子・上村健二・岡邑 衛

甲子園大学総合教育研究機構

要約：大学生や大学の教職員が「よいノート」について記したコメントを分析し、学生、教員、職員の立場に分けてそれぞれのノートに対する考え方や、立場による考え方の違いの一端を示す。学生はノートを作る際に色の活用を主要な手段の一つととらえ、様々な学修方略の下に色を活用していた。自分で関連情報を補いながら学修成果をノートにまとめていくことも重視されている。教員は、区分けにより情報が整理されたシンプルなノートを好む傾向にあった。また、職員と学生が言葉を交わし、職員の経験や考え方に学生がふれる機会を設けることで、教員とは違った観点から好ましい刺激を与えられるという可能性が示唆された。

(キーワード：学生の意識、学修方略、要点の理解、職員の活用)

**Requirements for 'Good Notes' that College Students, Faculty
and Administrative Staff Assume:
From the Comments at Koshien University Best Notebook Award**

Masanobu Masuda, Mariko Nishikawa, Kenji Kamimura, Ei Okamura

Institute of General Education, Koshien University

Abstract: This paper analyzes comments on 'good notes' by college students, faculty and administrative staff. The analysis demonstrates their ideas of notes and differences in perspective according to their status. Students regard color highlighting as a major means in making notes, and make use of color highlighting under a variety of learning strategies. They also attach importance to organizing learning outcomes on their notebooks, while supplementing them with relevant information by themselves. Faculty members rather prefer simple notebooks in which pieces of information are classified in several zones. The possibility is suggested that chances for students to talk with administrative staff and hear about their experiences and thoughts provide students with favorable inspiration in somewhat different perspectives from those of faculty.

(Keywords: students' attitude, learning strategies, comprehension of the point, administrative staff's active roles)

1. はじめに

ノートをとることは、大学で授業を受けて学ぶ上で重要な技術である。近年では文献や大学の初年次教育科目でその方法が扱われることも多い。ただ、文献での「よいノート」の要件についての記述は直感的には頷けるものであるものの、それらの要件がノートをとる学生のどのような志向性

と結びついているのかということは見えてこない。

本稿では、大学生や大学の教職員が「よいノート」について記したコメントを分析し、彼らのノートに対する考え方や、立場による考え方の違いの一端を示す。学生、教員、職員の立場に分けて「よいノート」の要件を検討した研究は、管見の限り他にはない。これらの大学関係者のコメント

を具体的に分析することで、教育現場での関係者の意識を示し、文献で論じられている「よいノート」の要件がその意識と一致しているかどうかを検討する。

2. 先行研究

2000 年代から初年次教育のテキストが日本で多く出版されるようになり、ノートのとり方についてもその中で取り上げられている。表 1 は、複数のそうした文献で「よいノート」の要件として挙げられた要素をまとめたものである。表の上部のアルファベットは後の議論の便宜上付したものである。また、文献で例として挙げられているノートが表 1 の要件を満たしている場合でも、著者がその要件に明示的に言及していない場合は表 1 で○印を付けていない。

最も多く言及されていた要件は「要点を書き留める」(a) というものであり、表 1 に挙げた 12 の文献のうち 8 つの文献で取り上げられている。これは、教員の説明から要点を読み取って書き留めるということが大学生に求められる受講姿勢だということを反映した結果だと考えられる。大学の授業では、書き留めるべき事項を教員が指示するとは限らないし、そのような指示があった場合

でも、その事柄だけを書き留めていては授業内容のほんの一部しか記録できない。多くの文献では、教員の口頭説明から要点を把握するための授業の聴き方をも併せて取り上げており、教員の明示的な指示なしでも学生が授業の要点を書き留められるように導いている。

「流れがわかるようにノートをとる」(f) という要件も、大学生に求められる受講姿勢を反映している。高等学校までは、板書を活用しながら教員が授業内容を体系的に構成して生徒に提示し、生徒がそれをただ書き留めればよかったかもしれないが、大学の授業では教員の講義を学生が自分で再構成してノートに書き留めることが期待される。教員の板書が断片的であったとしても、口頭説明と関連付けながら流れを持った形で書き留めることが求められている。

そのような記録の具体的な方法も多く言及されている。「見出しをつける」(b), 「メモ欄を設ける」(e), 「ノートのページを区分けし、書く情報の種類によって使い分ける」(g), 「内容の区切り目でページを替える」(l), 「図表、番号や箇条書き、矢印を活用する」(i, j, t) がその例である。重要な情報を目立たせるための方法として、「囲み、印、下線や文字強調を活用する」も挙げられている

表1 複数の先行研究で指摘されている「よいノート」の要件^{1~12)}

| | a | b | c | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u |
|----------------|----|-----|----|-------|-----|----|-----|----|----|------|----------|-------|-----|------|---|------|------|---------|------|----|----|
| | 要点 | 見出し | 余白 | 記号・略号 | メモ欄 | 流れ | 区分け | 囲み | 図表 | 箇条書き | 番号・ページ番号 | ページ替え | 内容で | 口頭説明 | 印 | 見やすさ | 丁寧な字 | 紙面全体を使用 | 文字強調 | 矢印 | 疑問 |
| 齊藤 (1983) | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | | |
| フライ (1996) | ○ | | | ○ | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | |
| 堤 (2003) | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | |
| 北尾 (2005) | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | ○ | ○ | | | |
| 学習技術研究会 (2006) | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | ○ |
| 藤田 (2006) | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | |
| 横山 (2006) | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | |
| 齋藤・源田 (2007) | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | ○ |
| 田村 (2007) | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| 太田 (2008) | | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | |
| 太田 (2009) | ○ | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | | ○ |
| NHK (2013) | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | ○ |
| 言及文献数 | 8 | 7 | 6 | 5 | 5 | 5 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |

(h, n, p, s)。また、口頭説明を書き洩らさないように速くノートをとるための方法として「記号・略号を活用する」(d)への言及も多かった。

ここまでで論じていないが多くの文献で言及されていた要件は「余白を取る」(c)である。これについては、ノートの見やすさのみならず、後で書き込みを加えられることが重視されていた。

本節では先行研究で挙げられている「よいノート」の要件を概観し、それが大学生に求められる受講姿勢の反映であることを示した。では、これらの要件は実際の学生の意識と一致しているだろうか。本節で取り上げた文献の中には、学生の実際のノートに基づいて「よいノート」の要件を抽出しているものもあるが、その要件は多くの場合には学生のノートを教員の目を見た結果抽出されたものであり、そのノートを書いた学生自身の目的意識は少数の文献で示されているにすぎない(斉藤 1983¹⁾、太田 2008¹⁰⁾、2009¹¹⁾)。そこで次節以降では、学生支援行事「甲子園大学ノート大賞」(以下、ノート大賞)の応募ノートに対する学生と教職員のコメントを分析し、実際の学生の意識を探る。

3. 「甲子園大学ノート大賞」

本節では、ノート大賞および分析対象となるコメントの概要を記す^{注1)}。

甲子園大学で2005年度から年1回実施しているノート大賞では、ノートをとることを大学生の自主的な学びの体現としてとらえ、初年次教育科目と連動させることで、新入生が早期に自らの学習姿勢を意識することを狙っている。全学生を対象に授業1コマ分程度のノートの応募を募り、審査を経て10作品程度に賞を与えている^{注2)}。応募作品は、授業中にとったノートでも、応募用書き直したのも、自分の学修用にまとめ直したのもよい。応募学生は、作品にエントリーシートを添えて応募する。エントリーシートは、応募作品で工夫した点とそのようにした理由を5点以内で記入するようになっており、エントリーシートを通じて審査員が当該ノート作成の際の学生の目的意識を知ることができるようになっている。ノートをとる際の工夫をここで言語化させること

で、応募学生が自らの学修における取り組みを見つめ直す機会を作るという教育的な狙いもある。このエントリーシートの記載内容が、次節以降で「応募学生コメント」として分析対象となっている。なおコメントの件数はエントリーシートの枚数ではなく、エントリーシートに記された「工夫した点」の件数に対応させている。

一次審査は、ノート大賞主管部署で、教養教育を担当する総合教育研究機構の教員から成る審査員が行い、二次審査は、指定審査員と一般審査員が行う。指定審査員は教員で、学長、副学長、教務部長^{注3)}、各学部および総合教育研究機構の学部長・機構長、各学部および総合教育研究機構の教務委員長から成る。一般審査員は、教職員、学部生、大学院生、聴講生、科目等履修生のうち、審査に協力した者である。二次審査進出作品は大学構内および大学の電子掲示板に掲出され、上記の大学関係者は大賞にふさわしいと思う一作品に一票を投じることができる。この投票を行った者が一般審査員である。

上記の一次審査員および二次審査員は1作品を大賞に選び、選んだ理由を書く。この記載内容が次節以降で「審査教員・助手コメント」「職員コメント」「一般学生コメント」として分析対象となっている。

また、ノート大賞を契機に学修を発展させるため、応募ノートにはその科目の担当教員がよい点や改善を望む点についてコメントを返している。このコメントの内容が「科目担当教員コメント」として次節以降で分析対象となっている。

4. コメントの分析

本節では、一般審査員を含める形に審査方法を変更した2012年度以降のノート大賞における学生と教職員のコメントを分析する。ただし科目担当教員にコメントを依頼するようになったのは2013年度以降のため、2012年度は科目担当教員コメントが存在しない。また、2014年度の一般審査員コメントは本稿執筆時点で集計中であるため、分析対象に含まれていない。表2に、分析対象のコメント件数を種類別に示す。

表 2 分析対象コメントの内訳および件数

| | 2012年度 | 2013年度 | 2014年度 | 合計 |
|---------------|--------|--------|--------|-----|
| 応募学生コメント | 107 | 72 | 54 | 233 |
| 一般学生コメント | 34 | 27 | - | 61 |
| 指定審査教員コメント | 19 | 20 | 15 | 54 |
| 一般審査教員・助手コメント | 18 | 14 | - | 32 |
| 科目担当教員コメント | - | 17 | 11 | 28 |
| 職員コメント | 14 | 16 | - | 30 |
| 合計 | 192 | 166 | 80 | 438 |

分析にあたっては、多くのコメントに共通して現れるキーワードを著者らで分担して抽出し、抽

出結果を共有して協議をした後に、最終的には第一著者の責任でキーワードを認定した(表3)。コメント1件について複数のキーワードの認定を許している。キーワードは見た目に関するものと学修に関するものに大別された。

学生、教員、職員の別を問わず多かったのは「見やすい・わかりやすい」(a)、「復習しやすい・覚えやすい・思い出しやすい」(m)といった総評的なキーワードである。他の具体的なキーワードを

表3 コメントに見られたキーワード件数(2012~2014年度累計)

| キーワード記号 | 応募学生 | 一般学生 | 指定審査員 | 一般審査教員・助手 | 科目担当教員 | 職員 | 合計 | |
|--------------|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 見た目に関するキーワード | a | 78 (33.5%) | 40 (41.7%) | 23 (35.9%) | 15 (39.5%) | 11 (37.9%) | 16 (51.6%) | 183 (37.3%) |
| | b | 22 (9.4%) | 7 (7.3%) | 3 (4.7%) | 2 (5.3%) | 2 (6.9%) | 3 (9.7%) | 39 (7.9%) |
| | c | 14 (6.0%) | 1 (1.0%) | 2 (3.1%) | 0 | 1 (3.4%) | 0 | 18 (3.7%) |
| | d | 8 (3.4%) | 1 (1.0%) | 0 | 0 | 0 | 0 | 9 (1.8%) |
| | e | 11 (4.7%) | 0 | 1 (1.6%) | 1 (2.6%) | 0 | 1 (3.2%) | 14 (2.9%) |
| | f | 43 (18.5%) | 13 (13.5%) | 2 (3.1%) | 5 (13.2%) | 2 (6.9%) | 4 (12.9%) | 69 (14.1%) |
| | g | 5 (2.1%) | 12 (12.5%) | 2 (3.1%) | 1 (2.6%) | 1 (3.4%) | 0 | 21 (4.3%) |
| | h | 10 (4.3%) | 6 (6.3%) | 6 (9.4%) | 2 (5.3%) | 5 (17.2%) | 2 (6.5%) | 31 (6.3%) |
| | i | 8 (3.4%) | 3 (3.1%) | 9 (14.1%) | 4 (10.5%) | 3 (10.3%) | 3 (9.7%) | 30 (6.1%) |
| | j | 4 (1.7%) | 3 (3.1%) | 4 (6.3%) | 1 (2.6%) | 1 (3.4%) | 0 | 13 (2.6%) |
| | k | 12 (5.2%) | 4 (4.2%) | 5 (7.8%) | 2 (5.3%) | 2 (6.9%) | 0 | 25 (5.1%) |
| l | 18 (7.7%) | 6 (6.3%) | 7 (10.9%) | 5 (13.2%) | 1 (3.4%) | 2 (6.5%) | 39 (7.9%) | |
| 合計 | 233 | 96 | 64 | 38 | 29 | 31 | 491 | |
| 学修に関するキーワード | m | 34 (23.3%) | 5 (33.3%) | 19 (38.8%) | 7 (29.2%) | 2 (9.1%) | 3 (18.8%) | 70 (25.7%) |
| | n | 15 (10.3%) | 1 (6.7%) | 3 (6.1%) | 2 (8.3%) | 4 (18.2%) | 1 (6.3%) | 26 (9.6%) |
| | o | 14 (9.6%) | 1 (6.7%) | 0 | 0 | 0 | 1 (6.3%) | 16 (5.9%) |
| | p | 1 (0.7%) | 0 | 11 (22.4%) | 3 (12.5%) | 11 (50.0%) | 2 (12.5%) | 28 (10.3%) |
| | q | 19 (13.0%) | 1 (6.7%) | 5 (10.2%) | 1 (4.2%) | 3 (13.6%) | 2 (12.5%) | 31 (11.4%) |
| | r | 11 (7.5%) | 0 | 4 (8.2%) | 2 (8.3%) | 0 | 0 | 17 (6.3%) |
| | s | 13 (8.9%) | 2 (13.3%) | 0 | 3 (12.5%) | 1 (4.5%) | 3 (18.8%) | 22 (8.1%) |
| | t | 4 (2.7%) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 (1.5%) |
| | u | 15 (10.3%) | 0 | 2 (4.1%) | 2 (8.3%) | 0 | 1 (6.3%) | 20 (7.4%) |
| | v | 8 (5.5%) | 0 | 2 (4.1%) | 2 (8.3%) | 0 | 2 (12.5%) | 14 (5.1%) |
| | w | 12 (8.2%) | 5 (33.3%) | 3 (6.1%) | 2 (8.3%) | 1 (4.5%) | 1 (6.3%) | 24 (8.8%) |
| 合計 | 146 | 15 | 49 | 24 | 22 | 16 | 272 | |

(注) 見た目に関するキーワード： a. 見やすい・わかりやすい／b. 色を使って強調する／c. 機能別に色を使う／d. 色を使って優先順位を示す／e. 色の種類を少数に絞る／f. 色以外による強調(下線, 印, 絵, 吹き出し, 囲み, 付箋)／g. 字(大きく, きれいに)／h. 図(大きく, 明晰に, きれいに)／i. シンプルに／j. 空間を取る(見やすい)／k. 空間を取る(書き込みができる)／l. ノートを区分けする

学修に関するキーワード： m. 復習しやすい・覚えやすい・思い出しやすい／n. 口頭説明を書く／o. 暗記シート使用に適した色・レイアウト／p. ポイントを理解できている／q. 自分でまとめる／r. まとめる過程で学べる／s. 試験を意識している／t. 日付を書く／u. ページ番号・行番号を書く／v. 短時間で書く／w. やる気が出る・楽しい

挙げた上でこれらの総評的なキーワードを書くコメントが多いことによると考えられる。もう一つ多く見られた「色以外による強調」(f)には、下線、印(マーク)、イラスト、吹き出し、囲み、付箋が含まれる。このように多種の強調手段をこのキーワードの下にまとめたためか、件数が多くなっている。多種の強調手段が実際に用いられているということは、学生の学修上の工夫の一端を示していて興味深い。一つずつの手段に分けると件数が減るため、強調手段の使い分け方までは分析できなかった。

4.1. 応募学生コメント

色の使用に関するキーワード(b~e)の合計が23.6%(55件)を占めているのが特徴的である。ノートを見る側である一般学生や教職員のコメント(4.2~4.6節)では色の使用に関するキーワードの件数が多く見られるわけではないのだが、ノートを作る学生は、色ペン等による着色を主要な手段の一つとして活用しているということが伺える。それも、単に強調したいところを着色する(b)のみならず、様々な学修方略の下に活用している。以下のコメント①では色に役割を持たせて使い分けており(c)、コメント②では重要度の優先順位を色で表している(d)。コメント③はこれらとともに実践しており、機能の別と重要度の優先順位の両方を色で表している例である。

①文法は緑のペンで書き、熟語などは蛍光ペンなどで分かりやすくした。

②小テストにも出るような重要な用語、絶対覚えるべき事項は赤色、その次に大事な用語、頭に入れておくべきものは青色と2色にして使い分けることで自分の中で優先順位をつけて頭に入れることができる。

③基本的に優先的に覚えるものにオレンジ、大事だと思う用語、文章に青の下線を引いている。また、ピンクの線は、講義中の配布プリントで出されている部分をチェックし、後で確認できるようにしている

また、「自分でまとめる」(q)ことも応募学生に重視されている(19件, 13.0%)。「表はたくさんあるものを自分でかくことで整理できたり、図は言葉だけではわかりにくい事項も自分で文をよんで順番にかいていけば覚えられるし頭に入りやすいから。」「教科書の図だけでは分からないので、もっと詳しく頭に入れるために、細かいところまで絵で描いた。」といったコメントから、授業で学んだ内容の理解を確かにするために教科書等を参照しながら学修した成果がノートに記録され、ノートが学修の上で効果的に活用されている様子が伺える。

また、応募学生コメント(本節)、一般学生コメント(4.2節)を問わず「やる気が出る・楽しい」(w)の件数が多いのも学生のコメントの特徴である。学修意欲を促進するための工夫として、以下のコメント3件のような内容が見られた。

白黒で書くよりカラーの方が、後で自分で見る時少しやる気になる。

重要な部分にイラストを書いた。ノートを見直した時に注目しやすくするためと、勉強のモチベーションを上げるため。

板書以外の自分のメモは話ことば[ママ]で書く。読むだけで理解できるようにと、読みやすくして、楽しめるように、するためです。

学修意欲を促進する工夫の内容は個々の学生によって異なる。色を多く用いたノートによって学修意欲を喚起される学生もいれば、そうでない学生もいるだろう。したがってこのような意欲面は文献ではほとんど言及されない。しかし実際に学生が学修する上では、個々の学生が学修を意欲的に楽しめるような工夫をすることも重要な要素であることが伺える。

同様に、文献では言及されていないが少なからず見られたキーワードとして「暗記シート使用に適した色・レイアウト」(o)(14件, 9.6%)がある。暗記用の赤いシートで隠して暗記できるように、重要事項はオレンジ色のペンで書くというコ

メントが多く見られた。学修方略において応募学生が暗記シートという手段を活用していることと、学修方略に基づいてノートの取り方が考えられていることがここからわかる。

4.2. 一般学生コメント

見た目に関するキーワードでは、「字（大きく、きれいに）」(g) の多さが目立つ (12 件, 12.5%)。応募学生 (4.1 節) は自分の字を見慣れているので、字の大きさや美しさはノートを見る上で問題にならない。また、教職員 (4.3~4.6 節) は理解の質を重視するためか、字についてのコメントは少ない。しかし、他者のノートを審査している一般学生にとっては字の大きさや美しさはノートのわかりやすさの要件の一つであるようだ。

もう一つ目を引くのは、「学修に関するキーワード」全体の件数の少なさ (15 件) である。ただし、審査の際に学修面が考えられていないわけではない。以下のコメント 2 件のように、学修に活用しやすいノートの特徴を「見やすい」の一言で表現しているコメントが多いことが「学修に関するキーワード」の件数の少なさにつながっていると考えられる。

見やすい、どこが大事かすぐみつけれられる。

食品学Ⅲは、専門的な科目でまとめにくいのに、わかりやすく見やすいから。自分がその授業を受けるとしたら、このように書きたいと思ったから。

4.3. 指定審査教員コメント

「シンプルに」(i) (9 件, 14.1%) や「区分け」(l) (7 件, 10.9%) が多く見られたキーワードであった。以下のコメント 3 件のように、見やすいノートを作ることが復習の際の理解の深化を導くという考えが読み取れる。

講義のポイントが分かり易く書かれており、読み返しても見やすいようになっている。シンプルな記述で復習や覚える時にポイントを捉えやすい。文字も見やすい。

単語ごとにまとめられており整理されているので、ガチャガチャした感じがなく、蛍光ペンや色ペンのアクセントが効いている。短時間で見直しやすく工夫されている。

ノートの両端のスペースの活用が上手である。色の使い方もうまい。見やすく、後で復習する際にとってもわかりやすいと思う。(他人が見ても理解しやすい)

「空間を取る (見やすい)」(j), 「空間を取る (書き込みができる)」(k) を合わせると 14.1% (9 件) を占めていたことも、適度な余白が見やすさや自学の促進につながるという点で、同じ志向性に基づいていると考えられる。

「ポイントを理解できている」(p) というキーワードが多く見られた (11 件, 22.4%) のも特徴的である。4.1 節でも記したように、ノートは学生の学修成果を記録したものと位置付けられるので、学生が授業のポイントを理解できているか否かが重要な評価軸となる。前節までで見たように、学生の立場ではポイントが理解できているかどうか判断できないので、ポイントを理解するための「色の活用」(b~e), 「色以外による強調」(f), 「自分でまとめる」(q) といった手段がコメントで言及される。他方、教員はノートを見れば学生がポイントを理解できているか否かを判断できるので、その点を評価軸として用いているといえる。

4.4. 一般審査教員・助手コメント

「シンプルに」(i) (4 件, 10.5%), 「区分け」(l) (5 件, 13.2%) というキーワードが多く見られるのは指定審査教員コメント (4.3 節) と共通している。「色以外による強調」(f) に言及したコメントも多い (5 件, 13.2%) が、様々な点を評価しており、一概に傾向が見いだせない。

指定審査教員コメント (4.3 節) や科目担当教員コメント (4.5 節) と違い、「ポイントを理解できている」(p) というキーワードへの言及は少ない (3 件, 12.5%)。理由として考えられるのは審査形態の違いである。指定審査教員や科目担当教員が公式に審査ないしコメントを依頼され、手元に

当該ノートをお届けられるのに対して、一般審査教員・助手は指名されて審査を依頼されているわけではなく、構内や電子掲示板に掲出されているノートを見て審査を行っている。その違いにより、見た目に関するコメントが多くなった可能性がある。

4.5. 科目担当教員コメント

見た目に関するキーワードでは、総評的な「見やすい・わかりやすい」(a) の他に「図 (大きく、明晰に、きれいに)」(h) が多い (5 件, 17.2%)。図に関する 5 件のキーワードは「解剖学」、「臨床医学」、「生物学」のノートに対するコメントに見られたものであり、生体組織を正確に描写することが必要な科目特性を反映していると考えられる。

学修に関するキーワードでは、「ポイントを理解できている」(p) というキーワードが 11 件見られた。これは、学修に関するキーワードの全件数の 50%にあたる多さである。教員の立場では「学生が授業のポイントを理解できているか否か」という重要な点が評価軸として活用できるという点には 4.3 節で既にふれた。特に科目担当教員は自分の授業のポイントを当然熟知しており、その点についての学生の理解度を判断できるので、学生が授業のポイントを理解できているか否かを評価軸として用いる傾向が出てくるのだろう。「口頭説明を書く」(n) の件数がやや多い (4 件, 18.2%) のも、自分が授業でした口頭説明の内容を科目担当教員が知っていることの反映だととらえるかもしれない。

4.6. 職員コメント

目立った傾向は見いだせない。しかし、コメントの内容は大いに興味深いものであった。職員もかつては学生であり、ノートのとり方を工夫して学修してきたので、自分なりに「よいノート」観を持っている。以下に示すコメントはその一例であるが、他にも多様な観点からのコメントが見られた。学生としての経験はあるが大学の授業を担当した経験はない職員が大部分であると思われるため、元学生としての経験に基づきながらも特定の視点にはとらわれず、多様なコメントが集まっ

たと考えられる。

ノートは「SIMPLE IS BEST」と私は思います。また、「書く事にあまり時間を掛けず」かつ、「後で見てよく分かる」というのが、ノートの大切な要素です。加えて色を使って鮮明に書いている点も良いと思いました。

また、職員は授業担当者としてではないが学生の成長を見守り、助ける立場にある。以下のコメント①からは、職員も学生に望む学修面の取り組みについて考えを持ちながら学生を評価している様子が伺える。またコメント②からは、学生の取り組みを温かく見守っている様子と、学生の成長を願う素朴な感情が伺える。なお、コメント②は「健康心理学特論」のノートで育児に関する内容をまとめたものについてのコメントである。

①「何のためにノートを利用するのか」という目的をはっきりとさせており、この教科で学ぶべきことは何なのか、どうすれば効率的に学べるのかという意図に沿ったノートづくりができていたように感じられます。見た目の美しさや、まとまりのよさの点では、他の候補作品のほうがよくできているようにも思いますが、“見せる”のではなく、“学ぶ”ものとしてノートをとらせ、また、その目的に合致したものが作りあげられるだけの能力を持っている点を評価しました。

②内容がわかりやすく、納得することがいろいろあった。将来母になる人にぜひ読んでほしいと思った。

4.7. 分析のまとめ

学生、教員、職員の立場に分けてコメントを分析した結果、学生はノートを作る際に色の活用を主要な手段の一つととらえており、機能や重要度の優先順位に応じて色を使い分けるなど、様々な学修方略の下に色を活用していることがわかった。また、教員の話を書き留めるにとどまらず、自分で関連情報を補いながら学修成果をノートにまと

めていくことも重視されており、ノートが学修の上で効果的に活用されている様子が示された。加えて、文献で言及されることは少ないが、学修を意欲的に楽しめるように工夫することも重要な要素であることがわかった。

教員は、区分けにより情報が整理されたシンプルなノートを好む傾向にあった。また、学生が授業のポイントを理解できていることが「よいノート」の要件として重視されていた。授業の要点の理解はノートとりの技術に留まらない本質的な問題である。先行研究のように、教員の口頭説明から要点を把握するための授業の聴き方と併せて指導する必要がある。

ノートに対する職員の考え方は管見の限り先行研究で言及されていない。本稿の調査では、元学生としての経験に基づきながらも特定の視点にはとらわれない、多様なコメントが見られた。また、学生の成長を見守り、助ける立場にある者として学生の成長を願っている様子も伺えた。近年では各大学で教職員協働で行う事業が増えてきているが、本稿の分析結果は、「学生経験者」として先輩である職員と学生が言葉を交わし、職員の経験や考え方に学生がふれる機会を設けることで、教員とはまた違った観点から好ましい刺激を与えられるという可能性を示唆する。

先行研究で論じられている「よいノート」の主要な要件で、本稿で分析したコメントには見られなかったのは「流れがわかるようにノートをとる」という点である。学生は、授業で聴いた個別の情報の中で重要なものを色などの使用により強調するという志向性を持っており、授業全体の流れを必ずしも意識していないようである。流れを書き表すための手段である番号、箇条書き、矢印を用いているノートはあるのだが、それらの活用は学生のコメントでほとんど言及されていない。このことは、授業の流れをノートにとらえている学生であっても、その重要性を明確に意識しているわけではないということを示唆する。

授業の流れは、個別的な情報にのみ注目するのではなく、ある程度の長さの内容を通して読まないと感じにくいように思われる。したがって、学生に授業の流れを意識させるためには、ある程度の

長さの内容を通して読むような復習方法を取り入れるように呼びかける必要があるだろう。

なお、教職員のコメントでも流れについての言及は少なかった。この原因としては、ノート大賞で提出されるのが 1 コマ分程度のノートであるために流れが感じにくいということと、科目担当教員以外は自分が担当していない授業のノートについてコメントしている場合が多く、ノートと授業の流れが一致しているか否かを判断しにくいということが考えられる。

もう一つ、先行研究で挙がっている「よいノート」の主要な要件で、本稿で分析したコメントでは言及されていなかったのが「記号・略号を活用する」点である。学生の日頃の会話を思い起こしても、少なくとも甲子園大学の学生は速くノートをとるために記号・略号を使うということをはほとんど意識していないと思われる。口頭説明を書き洩らさないように速くノートをとる意識付けや方法論の指導を行っていく必要がある。

5. まとめ

本稿では、大学生や大学の教職員が「よいノート」について記したコメントを分析し、それぞれのノートに対する考え方や、立場による考え方の違いの一端を示した。

ただし、本稿の分析が一定の限界の下でなされていることは事実である。指定審査教員と一般審査教員・助手で審査形態が異なるなどの要因により、教員や学生という同じカテゴリーの中に質の異なるコメントが含まれている。また、2 学部しかない甲子園大学で 3 年間のノート大賞に応募された 27 科目 56 作品のノートに対するコメントなので、幅広い科目のノートを網羅的に扱ったわけではない。科目系列ごとに十分な数のノートが集まっているわけではないので、生物系科目と語学科目など、科目系列の異なる科目のノートも区別せず包括的に扱っている。

しかし、そのような限界の下ではあるが、本稿の調査は、大学生や大学の教職員のコメントを多く取り上げて分析した点で、大学の教育現場の実情を示す意義を持つ。今後はより多くのノートを集め、コメントを集める方法も検討して分析方

法を改善した上で分析を発展させたい。教育現場の実情を踏まえながら「よいノート」の要件を検討し、その要件を実現できるような学修指導を行うことで学生の学修の質の向上につなげたい。

注

- 1) ノート大賞についてより詳しくは、西川他 (2013)¹³⁾を参照されたい。
- 2) 応募数は年により異なるが、15~30 作品程度の年が多い。
- 3) 2014 年度からは教務委員会と学生部委員会が統合されて学務部委員会となり、教務部長は廃止されて学務委員長が置かれた。2014 年度は副学長が学務委員長を兼任している。

参考文献

- 1) 斉藤喜門 (編著) : 受講ノートの録り方—大学・短大で学ぶ人のために—, 1-174, 蒼丘書林, 東京, 1983
- 2) ロン・フライ : アメリカ式ノートのとり方, 1-210, 東京図書, 東京, 1996 (Ron Fry, 1994 [2nd ed.], *Take notes*, The Lois de la Haba Agency, Inc., New York)
- 3) 堤良一 : ノートの取り方・ノート作成の実例, 田中共子 (編) よくわかる学びの技法, 14-21, ミネルヴァ書房, 京都, 2003
- 4) 北尾謙治 : 第 4 章 ノートの取り方, 北尾謙治 他 広げる知の世界—大学での学びのレッスン—, 39-48, ひつじ書房, 東京, 2005
- 5) 学習技術研究会 : 知へのステップ 改訂版—大学生からのスタディ・スキルズ—, 1-204, くろしお出版, 東京, 2006
- 6) 藤田哲也 : 第 1 講 ノートの取り方 1 : 大学の多様な授業スタイル・第 2 講 ノートの取り方 2 : 役立つノートとは, 藤田哲也 (編著) 大学基礎講座 改増版—充実した大学生活をおくるために—, 11-49, 北大路書房, 京都, 2006
- 7) 横山千晶 : 第 2 章 講義を聴いてノートを取る, 佐藤望 (編著)・湯川武・横山千晶・近藤明彦 アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門—, 29-42, 慶應義塾大学出版会, 東京, 2006
- 8) 齋藤ひとみ・源田雅裕 : ノートテイキングにおける方略使用の効果に関する検討, 日本教育工学会論文誌, 31 (Suppl.), 197-200, 2007
- 9) 田村仁人 : アタマが良くなる合格ノート術, 1-175, ディスカヴァー・トゥエンティワン, 東京, 2007
- 10) 太田あや : 東大合格生のノートはかならず美しい, 1-111, 文藝春秋, 東京, 2008
- 11) 太田あや : 東大合格生のノートはどうして美しいのか?, 1-111, 文藝春秋, 東京, 2009
- 12) NHK, 2013, 成績を伸ばすカギ! ノート術, テストの花道 2013 年 4 月 22 日放送, <<http://www.nhk.or.jp/hanamichi/p2013/130422.html>>, (2014 年 12 月 24 日)
- 13) 西川真理子・増田将伸・梶木克則・上村健二・前馬優策 : 学生の自主的な学びをサポートするひとつの企画の試み—「甲子園大学ノート大賞」—, 甲子園大学紀要, 40, 23-31, 2013